

本科1期7月度

解答

Z会東大進学教室

難関国公立大国語／難関大国語T

京大国語／難関大国語T（京大）

一橋大国語／難関大国語T（一橋大）



## 【添削課題】

出典：沼野充義『W文学の世紀へ』／一橋大学 前期日程 07年

## 文章略解

『解答』と同じ

## 解答

日本語の乱れが指摘されるが、言葉は常に変化するから、言葉の乱れは活力の証だ。その力を支えるのは、個人的な交感を通じて人間としての互いの存在を認識しあう、言葉の基本機能だ。社会の情報化には、言葉が基本機能を失つて社会の構成者が画一化される全体主義につながる危険がある。時代の激変に耐えて人間社会を支えてきた言葉が簡単に基本機能を失うことはないだろうが、言葉を支配する動きの潜在的な危険には注意が必要だ。〔200字〕

## 【問題】(自習)

出典：福田恒存「文化破壊の文化政策」（『読売新聞』一九五九・一・四）／一橋大学 前期日程 99年

文章略解

《解答》と同じ

### 解答

「文化」とはそれぞれの民族や時代の人の「生き方」である。私たちは過去の人の「生き方」を見ることはできず、また現在の私たちの「生き方」を対象化できない。したがって文化を意識することはできず、文化は目的や価値とは関わらないものだと言える。この点で、意義づけから始まる文化政策は文化とは相容れない。他者との優劣の比較による価値づけや意義づけよりは、「生き方」の深まりから文化を見るように心がけるべきである。〔200字〕

### 解説

一橋大学の前期日程二次試験においては、このような形での要約問題が「国語」の大問三つのうちの一つとして毎年出されている。年度によっては着眼点が示され「その点が明らかになるように」と誘導的な設問になっていることもあるが、本問のように、単に「右の文章の論旨を要約せよ／要旨をまとめよ」だけのような形になっていることが多い。

要約文の作成に際しては、①キーワードを抜き出し、それについての説明をまとめていく・②中心段落を抜き出し、その内容に関連する部分の表現を絡めて肉付けしていく……といった二つの方向があり得よう。ここでは、設問に先立つて「『日本の希望』というテーマで連載された記事の一部」であると断り書きがなされ、問題文の冒頭でも「ところで、私の受け持ちは文化である」とあることから、「文化」がキーワードであると推察できよう。

「文化」についての筆者（福田）の論述は、「文化」そのものの意味は何か」（7行目）の問いかけに始まり、エリオットの言葉を引いて「文化とは民族や時代の『生き方』なのである」（12行目）と展開されている。この「文化」＝「生き方」ということを軸にして

解答をまとめていけばよい。この際、注意することは、このようにカギカッコなどの記号が付されている語（筆者独自の意味合いがこめられている語）については、説明を添えるなり、他の表現に置き換えるなどして、そのままでは用いないことだ。そうでないと、採点者に対してその語の理解を示すことができない。この設問のように、解答の字数に余裕がある場合には前者の方向（説明を添える）でいくとよい。

「生き方」についての筆者（福田）の記述を追っていくと、「『生き方』とは、そういうものである」（23行目）という一節に至る。この「そういうもの」とは「対象として目の前に眺めることの出来ないものである」（20行目）・「私たちには見ることが出来ない」（22行目）・「見ることも意識することも出来ないもの」（23～24行目）とあるところから明らかであろう。要するに「対象化できない」「不可視なもの」ということだ。この点の指摘がほしい。

ここが押さえられれば、「文化」＝「生き方」は不可視なものであり、したがって「意識、目的、価値とは関わりがない」（25行目）であるのに対し、「文化政策はその意義づけから始まる」（34～35行目）ものであり、これと相対立するものである、という主張とのつながりも明らかになろう。

以上をまとめれば、以下のようにになろうか。四つぐらいの文で、それぞれの役割分担を明確にして書いてみるとよい。

- i 文化とは「生き方」である。
- ii 「生き方」は見ることも意識することも出来ない。
- iii したがって、意義づけを求める文化政策と文化とは相容れない。
- iv われわれは意義づけに囚われず「文化」＝「生き方」自体を見据えるべきである。

●  
メ  
モ  
●

## 【問題】（演習）

出典：郷原宏の文章『立原道造詩集（解説）』／横浜市立大学 商学部 99年改

## 文章略解

立原道造の詩の風景と現実とを対応させていては、理解是不可能である。彼の詩に描かれた世界は彼の詩の中のみの幻影であり、それは自分に告げることを唯一の方法とせざるを得なかつた詩人の傷ついた観念の生んだものであるからだ。彼は近代抒情詩人の多くとは異なり、思い入れや決意と無縁であつた。詩人としての矜持に必要な主体性も放棄してしまつたという点で、トニオ・クレーゲルの「冷たい忘我」の世界を表現していると言えよう。

## 解答

問1 実体を失つた詩的世界を自分に対し語るだけだから。〔25字・解答例〕

問2 伝達を断念する〔7字〕（38行目）

問3 詩のなかの風景を現実の風景に対応させる〔19字〕（23～24行目の表現を使用）

問4 立原道造の詩の中の風景は、詩人の傷ついた観念が生んだ幻影であり、実体を持つものではないから。〔46字・解答例〕

問5 立原道造は、幻影を自分に向かつて語りかける際に、近代の抒情詩人の多くが持つているような理想への密かな思い入れを持たず、芸術家としての矜持につながる主体性さえも幻影にすぎないものとしてしまつてゐるから。〔100字・解答例〕

問6

芸術表現に際してその底に理想を抱くことを排除し、決意や主張などの思い入れを表現の中にこめようとする主体性それ自体を最初から放棄することによって、他人への伝達を完全に遮断してしまった精神世界。〔95字・解答例〕

## 【問題】(自習)

出典：野家啓一『物語の哲学』「第二章 物語と歴史のあいだ」／横浜国立大学 教育学部 97年

### 文章略解

歴史叙述の基になる文献史料は、事実そのものを記したものではなく、書いた人が自らの思い出に残る数々の出来事を経験に照らして意味づけるという解釈行為が施されている。こうした断片的な史料を統一した筋を持つ「物語」に構成する行為が歴史学者による歴史叙述の本質である。言語による歴史叙述には、それを書く人の関心による取捨選択が施されており、その意味において歴史叙述とは二重の解釈性を帯びた制作行為なのである。

### 解答

問1 ア＝膨大 イ＝妄想 ウ＝水結 エ＝汚染 オ＝彫

問2 A＝多くの人々が口にしたこと [12字・解答例]

B＝夜が明けきらない様子 [10字・解答例]

C＝淡く弱々しい模様 [8字・解答例]

問3 経験した事実のうちで印象の強いものは深い意味を帯び、印象の弱いものは弱い意味を帯びるといったように、その人の経験に照らして意味づけが決定されるということ。[77字・解答例]

問4 人間の「思い出」として印象に残っている断片的なできごとの相互のあいだに論理的な脈絡をつけ、ひとつの有機的な連関のもとに組織して提示するはたらき。[72字・解答例]

**問5** 各々の文献史料には筆者の経験に照らした解釈が施されており、それらを自分の関心に沿った一連の流れに再構成する歴史叙述という行為は事実を二重に解釈したものだということ。  
〔82字・解答例〕

※**問2**以下の解答欄の大きさは次のとおり。《解答例》として示したものはいずれもその大きさに見合った長さに調整してある。

問2 = それぞれヨコ13mm×タテ80mm×1行  
問3 = ヨコ13mm×タテ178mm×2行  
問4 = ヨコ13mm×タテ178mm×2行  
問5 = ヨコ13mm×タテ178mm×2行

### 解説

**問2** 語句の意味に関する出題の場合、この設問のように慣用句的なもの（故事成語・諺なども含む）や、やや古めかしい和語などが素材となることが多い。過去の出題に丹念にあたつておくことと並行して、この種の語句について集中的に学習しておくようとするといい。

Aの「人口に膾炙した」の「膾」は「なます」、「炙」は「あぶり肉」のこと。こうしたものが誰にでも美味に感じられる、という中国の故事が元になつていて。意味としては「多くの人が口にすること」。Bの「まだき」は形容詞「未だし」の連体形が転化したもの。「まだそうならない状態」を意味する。Cは形容動詞「あえかなり」の語義の問題。これは、「弱い様子」を意味する。この設問においては、単に「語句の意味を簡潔に説明せよ」とあるだけなので、このような辞書義を軸に解答を書いていけばいい。変に文脈に合わせてアレンジすると、語義そのものの理解が疑われて減点の恐れがある。

**問3** 単に「どういうことか」とある設問の場合、傍線部分の表現を検討することから説明すべきポイントを絞つていくことが先決。

ここでは、(1)「経験の遠近法による濾過と選別」という比喩表現の性質の指摘、(2)「一種の『解釈学的変形』」という曖昧な表現の具体化、の二点が求められているものと、まずは踏まえることだ。

(1)については、「遠近法」（遠くのものを小さく描き、近くのものを大きく描く方法）という語の辞書的な意味と、直前の「思い

出は過去の出来事のありのままの再現ではない」（20行目）という表現とを関連づけて考えれば説明の指向性は見えてこよう。傍線部分の直後にある、「強烈な印象を刻みつけた出来事はクローズアップで大写しにされ、さほど印象に残らない些末な出来事は遠景に退いてフェイドアウトする」（21～23行目）がこの「遠近法」の寓意である。これを汲み取って「体験した出来事のうち印象の強いものを重視し、弱いものを軽視する」というニュアンスが指摘できれば、ここでの「濾過と選別」の説明としては妥当であろう。

(2)については、問題文中で「解釈」（カギカツコつき）という表現が用いられている他の箇所を手がかりにしていくことから説明の指向性が見えてこよう。問題文中に「解釈」という表現は頻出しているが、第五段落で「『解釈』の産物」であることの指摘をした中に、それを言い換える形で「そこには関心の遠近法が働いており、記録に値する有意味な情報の取捨選択がなされている」（38～39行目）とあるところに注目したい。要するに、「解釈」とは「意味づけを与えること」という程度に引き取つておけばよからう。

こう考えてみると、(1)と(2)を関連づけて「印象の強い出来事には深い意味が与えられ、逆に弱いものにはさしたる意味づけが与えられない」という内容が浮かび上がつてこよう。この筋で解答が書かれていれば、基本的には出題の要求を満たしたものとなるう。

#### 問4

傍線部分に続く二つの文が、ここで言う「物語行為」による媒介の具体的な説明になつてている点に注目。設問で「物語行為」はどうのような働きをするのかと問われているのに対し、「……ことこそ、物語行為の役目にはかならない」（29行目）とあるわけだから、ここ的内容が解答の軸となることは明白である。要は、「思い出は断片的であるが、その「断片を織り合わせ、因果の糸を張りめぐらし、起承転結の結構をしつらえること」（28行目）ということだ。

では、その「結構をしつらえる」ことがいかなる意味で「歴史」への転生につながるのか。解答欄の大きさに鑑みればこの点の説明も補つておいた方がよからう。これについては、さらにその後の記述の中で「『物語る』という言語行為を通じた思い出の構造化と共同化こそが、ほかならぬ歴史的事実の成立条件なのである」（30～31行目）とあるところが手がかりになる。「歴史」とは単なる個人的・断片的な思い出（体験された事実の取捨選択）ではなく、それらが「構造化」され、「共同化」されたもののことなのである。この点の指摘もほしいところだ。

## 問5

傍線部分の直前に「だとすれば」とあり、その前に前提となる条件が示されていることに注目。「歴史の『史料』もまた、過去の『客観的事実』そのものではない。そこにすでに『解釈』の鑿が刻み込まれているのである」(49～50行目)とあるように、歴史叙述の素材となる「史料」が既に「解釈」を経たものであることを筆者(＝野家)は指摘している。それは、より具体的に言えば、さらに前の「記録に値する有意味な情報の取捨選択がなされている」(38～39行目)ということになる。まずはこの点の指摘がほしい。これが「解釈の解釈」の前の方の「解釈」の説明である。

では、もうひとつ、「解釈」とはどういうことか。これについては、傍線部分に続く記述が手がかりになる。歴史家による歴史叙述は、こうした「解釈」の産物である史料を用いて、さらに「ふるいにかけ、単純にし、組み立てる」(52行目)という性質を持っている。既に「解釈」の産物であるところの史料を組み合わせてさらに意味づけの秩序を与える。こうした意味での二重の解釈行為なのである。この点の指摘もほしい。

以上二点が明らかにされた解答ならば、おそらくは出題の要求を満たしたものとなろう。

## 【問題】（演習）

出典：和辻哲郎「もののあはれについて」／一橋大学 前期日程 02年

## 文章略解

本居宣長が文芸の本意として「もののあはれ」を主張したことは、当時文芸を道徳と政治の手段と位置づけがちだった時代にあっては画期的なできことである。この「もののあはれ」とは今日の「感情」一般を指していたが、宣長にとつては「理知」や「意思」ではなく、ただ「感情」つまり「人のまことの情」こそが人生の根底なのであり、文芸に表現された「もののあはれ」に没入することが人間の本質に触れる行為だったのである。

## 解答

問1 人は嬉しさなどよりも、悲しさやつらさのような思うようにならないことに深く心を動かすものだから。〔47字〕

／人は嬉しさよりも悲しさなど自分の意に添わないことに深く心が動くので、特にその用法に意味が偏ったから。

〔50字・別解例〕

問2 人生の根底にあるのは感情であり、感情を表現することに文芸の本意と独立性を確立しようとしたこと。〔47字〕

問3 道にかなつてきちんとした哲理や道徳は全て真実を偽った表面的なものであり、人の眞実の感情を深く考えたものは、きっと何となく頼りないものであるはずである。〔75字〕

## 【問題】(自習)

出典・山口博『王朝貴族物語』／早稲田大学 教育学部

### 文章略解

平安時代の貴族たちにはそれぞれに貴族学があつた。たとえば藤原師輔は「九条殿御遺誠」で読書・信仰・習字の教養の大切さを説き、俗人との交際を戒めた。また「枕草子」によれば、師輔の弟の師尹は娘の芳子に習字・琴・音楽などを勧めていたようである。こうした実学的貴族学に対して、紫式部が打ち出したのは人間形成を重視する貴族学であつた。それは「源氏物語」の乙女巻で夕霧に学問を勧めるくだりに如実にあらわれている。

### 書き下し……〔九条殿御遺誠〕

凡そ成長とは頗る物の情を知るの時なり、朝に書伝を読み、次いで手跡を学び、其の後諸遊戯を許さる。但し鷹犬博奕の重きは禁遇する所なり。

縦ひ人の善なりとも之を言ふべからず、況んや其の悪をや。止む事なきの外、輒ち他家に到るべからず。妄りに衆人に交はる勿かれ。交はりの難きは、古の賢の誠むる所なり。縦ひ人有りとも、甲と乙と隙有り、若し件の乙を好まば則ち甲其の怨みを結ぶ。此くのぞときの類、重く之を慎むべし。

### 現代語訳……〔九条殿御遺誠〕

そもそも（人が）成長するというのは、大いに物の情を知る（べき）ときのことなのである。朝に（起きたらまず）書物を読み、その後には習字を学び、その後に（はじめて）さまざまな遊戯を許されるものである。ただし、狩猟や博打を過度におこなうことは禁じるものである。

たとえ人の善い点があつても、これを（口に出して）言つてはならない。まして、その（他人の）悪い点については（決して言つてはならない）。やむを得ない場合以外は、気軽に他人の家に行つてはならない。むやみやたらと一般の人々と交際などするな。（他人と）

交際することの難しさは、昔の賢人たちが戒めていることである。たとえ（交際するに足る）人がいたとしても、甲と乙とでは仲違いがある（ものだ。そんなときに）もし、そのうちの乙を好んで付き合えば、たちまち甲が怨みを抱くことになる。このような類のことは、かさねがさね慎んだ方がいい。

### 〔枕草子・二十三段〕

まず第一にはお習字を練返しあ稽古なさい。次には琴のことを、他の人よりは格別に上手に弾こうと思いなさい。それからは古今の和歌の二十巻を全部暗記なさる（ということ）を、（あなたの）ご学問となさりなさい。

文字を上手に書き、和歌を上手に詠んで、何かのものの折じとにまつさきに（召されて）重用されるのは、羨ましい。

### 〔源氏物語・乙女〕

私自身「＝光源氏」は、朝廷の中で生まれまして、世の中の様子も知りませんで、夜も昼も（帝の）お膝許におりまして、（そんな中で）ほんの少し取るに足らぬ書物を読み覚えた（だけ）です。

ほんくらな親に賢い子が（生まれて親よりも）優るという例は、たいそう珍しいことですから、まして代々（血筋が）伝わるうちに、（学問から）遠ざかっていつてしまうのではないかと、これから（あなた＝夕霧の）将来がたいそう気がかりなので、（私はあなたの大学入学を）決めておいたのです。

（格式が）高い家の子として、官位叙任が思いのままで、世の中での盛んな勢いに思い上がるのがふつうになつてしまふと、学問などに自分自身を苦しめるようなことは、たいそう（自分とは）無関係に思われてしまうのも無理はないようだ。気軽な遊びを好んで、（自分の）思いどおりの官職・爵位に昇つてしまふと、その時代（の有力者）に従つてゐる世間一般の人たちが、内心では鼻を動かして（ばかりにしていながら）、（表面では）こびへつらつて（あなたの）機嫌を取り結んで従つてゐるうちは、自然と（自分を）いっぱいの人物であるかのように錯覚して、（世間での地位も）重々しいようなのだが、時が過ぎて、（出世するのが）当然な人に（あなたが）先をこされて、（あなたの）勢力も衰えてきた（その）末には、他の人から軽蔑されるようになると、頗りにするものがなくなつてしまふのです。やはり、学問を基本にしてこそ、政治家としての処世能力が世の中に重用される度合いも強くなるものでしよう。今さしあたつては（学問など）あてにならないようですが、最終的に社会の柱石重鎮になるという気構えを身につけたならば、（私がこの世に）いなくなりました後も、安心できるにちがいないから（学問を勧めるのです）。

問1 いはんやそのあくをや

問2 b…2 c…4 d…3

問3 e…3 f…1 i…5

問4 3

問5 5

問6 4

問7 B…3 C…4

問8 3

問9 4

問10 世のおもし（34行目）

### 解説

問1 融合問題において漢文分野の知識事項が問われる場合、基本的な句形に関しての設問が多い。相応の対策をすれば、ある程度の得点力の向上が望めるところだ。ここでは、「況……乎」が「いわんや……をや」と訓む抑揚の句形であるとの知識が問われているわけだ。これは、ある事柄を述べる場合に、前もってより程度の低いものを示しておき、その後に「まして……については言うまでもない」と強調するニュアンスを示す句形である。ここでは、直前の「縱人之善不可言之」と対比される形で、「人の善についてだつて発言すべきではないのに、ましてその悪は……」という意味になる。

問2 前問と同じく、漢文の基本的な知識事項の問題。ここでは助字の読みが問われている。いずれの部分に関する限り点の省略

がなされていないので、そこを手がかりにしていくことができる。

bについては、この字をはさむ前後が「甲」と「乙」になつていてことから、並列の関係であることは容易に推察できよう。こ  
こは「甲ト乙ト」と訓む。この「与」に相当する訓み仮名は「と」となる。「ともニ」と訓むと、「並列」「対比」の意味ではなく、「……  
といつしょに」という意味になつてしまふので不適切。

cについては、この字を含む「若好伴乙」の後の節が「則……となつていてる点に注目。この「則」（すなはチ）との関連で考  
えれば、傍線部分を含む部分は条件節になつていてると捉えるのが妥当であろう。「もし……」でよい。

dについても、この傍線部分を含む部分が「如此之類」となつていてることから推せば、「類比」「たとえ」の文脈であることか  
かる。「かくのごとくのたぐい」と訓み、「このようなものは」の意味になる。

**問3** eの「うかぶ」（浮かぶ||巴行下二段活用）に「暗記する」という意味もあるという知識があれば、苦もなく**3**が選べよう。問**4**でも検討するように、この引用古文は「習字」「音楽」「和歌」の三つを女房の教養として挙げているものである。その中で「古今の歌二十巻をみな」、つまり古今和歌集全二十巻を「うかべ」よ……ということだ、というふうに考えて「学習する」に近いニュアンスの選択肢を求めていつても正解に至れよう。

fの「うしろめたなし」は「うしろめたし」とほぼ同義（なしは接尾語）。「なりゆきが気がかりだ」というニュアンスの語である。これに最も適した選択肢は**1**。**2**では単に「気がかり」というだけでなく、「後悔」のニュアンスも添えられているのでややずれてくる。**3**では逆。**4・5**は「後ろ見」に関連する意味であり、「うしろめたなし」の辞書義からは外れる。

iについては、文脈義から絞り込むのが得策。この傍線部分を含む「したには鼻まじろきをしつつ、追従し、気色とりつつ従ふ」の主語は、直前の「時に従ふ世人」である。この「世人」たちが「高き家の子」（29行目）に対して「下では鼻まじろきをしながら、（上では）追従している」というのがこの部分の趣旨である。このように考えて「した」の意味として適切なもの……というふうに選択肢群を吟味していくと、**5**を選ぶことができよう。**3**では意味が広すぎ。**1**のような年代の問題でも、**4**のような年齢の問題でもない。**2**では意味が逆になってしまう。

#### 問4

空欄を含む「習字、**A**、和歌」は、直前に引用された古文の「ひとつには御手をならひ給へ。つぎにはきんの御ことを、

……さては古今の歌二十巻を……」とある部分に相当している。この対応関係が見抜ければ、空欄に相当すべきは「きんの御こと」つまりは「琴」であるとわかる。ちなみに「琴」とは、弦楽器の一種で、中国から伝来した七弦のもののこと。「箏」「和琴」などと区別する意味で「琴の琴」とも言う。

#### 問5

「給ふ」には「尊敬の補助動詞」（四段活用||ハ・ヒ・フ・フ・ヘ・ヘ）と、「謙譲の補助動詞」（下二段活用||ヘ・ヘ・フ・フル・フレ・ヘヨ）の二つがある。丁寧の用法はないので**3**は不適切。尊敬なのか謙譲なのかは文脈から判断していつてもいいが、双方の活用の違いから見きわめていく方がより確かである。

ここでは、この「給へ」の直後に接続している語が「おき」であることから考えていけばいい。この「おき」は四段動詞「おく」

の運用形。だとすればこの傍線部分は動詞に上接しているわけだから当然「運用形」であるということになる。運用形の活用語尾が一段になっているのだから、この傍線部分の動詞は下二段活用……と考えられる。したがって正解は5。上に係助詞「こそ」がないので、已然形とする捉え方は不適切である。

なお、この「謙譲の補助動詞」としての「給ふ」は「みる」「聞く」などの動詞に接続することが多い。主語は原則として一人称（書き手・話し手）となる。

**問6** 傍線部分の主語に相当するのが、直前の「学問などに身を苦しめむ事は」であることに注意。この点で「学問」を踏まえていな  
い選択肢**2・3**は不適切である。傍線部分を品詞分解すると「いと」（副詞）+「遠く」（形容詞・運用形）+「なむ」（係助詞）+  
「覚ゆ」（動詞下二段・終止形）+「べかる」（助動詞・連体形）+「める」（助動詞・連体形）となる。末尾が「べかめる」となつ  
ているのは「べかる・める」が「べかんめる」と撥音便化し、その「ん」の音が無表記になつた形である。意味としては「当然」  
+「推量」。だとすると1の「学問にもいつそ精を出す」では正反対。**4・5**の見きわめに際しては、この傍線部分が「つかさか  
うぶり心にかなひ」（29行目）・「心のままなる官爵にのぼりぬれば」（30行目）という表現の流れの中にあることに鑑みて、「官位」  
をきちんと捉えた4を取る。

#### 問7

**A** 接続詞・副詞の空欄補充に際しては、現代文と同様に、まずは選択肢に挙げられたそれぞれの語のはたらきを確認してから、該  
当箇所の前後関係に照らしていくのが得策である。ここでは、1は順接・因果関係、2は並列（同種のものをあとにつなぐ）、3  
は累加（より程度の甚だしいものが後に来る）、4は再確認もしくは注釈、5は逆接……という程度にそれぞれの相違を見きわめ  
てから空欄の前後を見比べよう。

**B** については、前に「親」と「子」の関係（つまりは直接の世代差）が述べられ、後に「つぎつぎ伝はりつつ、へだたりゆかむ  
程」、つまりは代々を隔ていくことが述べられているわけであるから、ここはまさに「累加」の用法であろう。

**C** については、前の部分で「高き家の子」が驕り高ぶつて学問をおろそかにすると、やがては人に疎まれることになる……とい  
う趣旨の内容が述べられ（問6の解説も合わせて参照のこと）、その上で「才をもととしてこそ……」と学問的な精進の重要性が  
述べられているわけであるから、「再確認」のニュアンスとなり得る4を入れるのが適切、ということになる。

**問8** 傍線部分の「うしろやすし」とは「あとの心配がない・安心だ」の意味。ここでは光源氏が息子・夕霧の将来について述べている。この「うしろやすし」の根拠については、前問のCで見てきたように「学問の重要さ」を説いたものとして考えれば3が選べる。そもそもこの古文 자체、光源氏が「嫡男である夕霧」を「大学に入れる」（23行目）という決定をするものとして引用されているのである。そこから推しても3を選べよう。1ではやや的外れ。何によつて「精神的に十分自立」するのかが足りない。2の「身分」云々は、逆にそれが安定することで驕ることを戒めている文脈（問6、問7のCの解説を合わせて参照のこと）に合わない。4の「詩歌管弦」はこの引用部分ではなく、前の引用部分に関連することがらである。5は問3のfと同様「後ろ見」との混同を想定した引っかけ選択肢であろう。

**問9** 四字熟語の知識問題も頻出事項である。直前までチェックを怠らないようにしたいものだ。「理非曲直」とは、「道理に合つないこと・合つていないこと」の意味である。

**問10** 直後に「具体的には政治家のことを指している」とすることが手がかりとなろう。問題文の筆者（山口博）は、『源氏物語』を夕霧に対しての光源氏の教育論として引用している。そして最終的に目指すべき「政治家」について、そうなるためには「人間や社会を深く見る目が必要だ」（38～39行目）という趣旨のものとしてこの古文を解釈しているわけだ。そのように押さえた上で、引用古文の中から、光源氏が夕霧に対して「最終的に目指すべきもの」を言い表している語句を探していけばいい。「つひの世のおもしとなるべき心おきてをならひなば……」という発言に着目できれば、この「世のおもし」つまりは「世の中を統治するもの」が「政治家」に相当するものだとわかる。



L3T/L3TK/L3TF

難関国公立大国語／難関大国語 T  
京大国語／難関大国語 T (京大)  
一橋大国語／難関大国語 T (一橋大)



会員番号	
氏名	